

和泉正敏（以下、和泉）は、牟礼町で先祖代々の石材店の家に1938年に生まれた。

和泉という名前は石工を職とする家系において珍しい名前ではなく、何世紀も前に中国人や韓国人の石工が定住し彼らの技術を教えたとされる大阪近郊の和泉国に祖先を持つ。

和泉は15歳の時に兄が経営する和泉屋石材店に弟子入りした。

若かりし和泉が、丹下健三によって設計され1958年に完成した香川県庁舎を訪れた。

その「南庭」には、ある巨石が用いられている。彼は一目でその巨石が庵治石だとすぐにわかった。庵治石は、和泉の出身である牟礼町のあたりで産出される石なのだ。庁舎の鉄筋コンクリートの建物と原形のまま配置された庵治石という丹下の現代的で独創的な“ひねり”の設計が彼の感性に強烈な印象を与えた。

丹下の庭からインスピレーションを受け、和泉はのちの1964年「石のアトリエ」を設立し、石積みの壁や石庭造りに特化した仕事をした。また石の灯籠、墓石、石の建築装飾のような伝統的な石彫など、石の仕事の持つ可能性を広げていった。

ほぼ同時期の1965年、イサム・ノグチ（以下、ノグチ）は、新しい素材や技術を採用したり、また古いものを採用したりと、様々な手法での制作活動をしていた。（1968年イサム・ノグチ著の自伝でも述べている）

ノグチは、彼が共に制作したいと望む人がいるところであればどの地へでも赴き、ニューヨークのクィーンズにあるアトリエとイタリアや日本などのスタジオを飛び回っていた。

そのような制作活動の中で木や石という素材を再び手に取ったことで、彼は人間と自然の共存についての考察を深めている。

「目に見える世界と目には見えない世界の新しい概念は、知識への洞察を与えるかもしれませんが、人間の目を通して見える世界は科学的事実以上のものです。

それは感情としてだけでなく知識として、我々

の意識の中に入り込みます。

木々は活気に満ちて成長し、花は儂く咲き誇り、山々は堂々として横たわっている。

彫刻が表現することは、これらの内に秘めた存在を、それ自体が重要で意味のあるものであるということを形に投影することです。」

彼は自然との共存を表現したもの、特に「内なる存在」に重点を置いており、それは間もなく出会うであろう和泉との作品を示唆しているようだった。

1967年、シアトル市から大きな依頼があり、大作「ブラックサン」の制作を始めることになった。

ノグチはこれまで京都の石工職人に依頼していたが、香川知事の金子正典氏、そして1964年に初めて牟礼町で訪れた時に会った建築家の山本忠司氏に連絡を取り、彼の頭にあるものを実行することができる腕を持つ地元の石工を集めてもらった。

山本氏は、ノグチに和泉を推薦した。

ノグチが和泉にその仕事を任せるのに十分な能力を持っており、約2年間かけて製作したブラジル産の巨大な黒御影石から彫られた直径9フィートの「ブラックサン」への和泉の献身的な姿勢は、ノグチをとっても満足させたものだった。

ノグチが和泉に惹かれた理由は、和泉が美術学校に通わず独学で技術を身に付けていたこと、英語が話せなかったこと、そして石を愛していたことだったという。

その後、ノグチは1969年から年に一度牟礼町を訪れるようになった。和泉は石の擁壁で囲った「ストーンサークル」という庭を造り、ノグチはそこで働いた。和泉と山本氏は丸亀市にある古い商家をノグチのスタジオにするために建て替え、作業場と展示場も設けた。

また1980年に和泉はノグチの家の背後にある丘に、多層庭園を造った。この庭園は花崗岩の月見台等、ノグチの石の作品の常設の場所となった。

和泉は、ノグチと出会ってから20年間、ノグチと石の会話の訳者となり、1969年以降ノグチの

牟礼町での仕事の重要な人物になっていった。

石や資源の知識をノグチに惜しみなく与えた和泉は、大きく広がる日本におけるノグチの石の制作をサポートし、委託作品とノグチが自分の楽しみのために作った作品の両方を管理するようになった。

ノグチにとって、和泉の長年にわたる石との関係や牟礼の地を知り尽くしていることが羨ましかった。和泉は石の知識と技術をもって、ノグチからの多岐にわたる様々なアプローチに応えようとした。

ノグチのアプローチを、和泉は次のように説明している。

「彼は重い石を軽く見せ、硬い石を柔らかく、動かない石を動かしているように見せようとしていました。私は彼を通して石へのアプローチを学びました。」

また、和泉の石に対する造詣は非常に深く、ノグチは彼が石を割る瞬間を「歴史の夜明けから日本人を通して私たちに降り注ぐ岩の儀式」と表現しており、哲学的なことまで及んでいた。このような「儀式」を経て彼ら2人の感性が共鳴していった。

1985年にニューヨークでノグチ美術館が開館し、その一部に和泉の関わった新しい彫刻が展示された。1987年のイサム・ノグチ庭園美術館のカタログには、ノグチの「研究」の発見が掲載されており、その多くは和泉の功績であることがカタログの冒頭に記載されている。

美術館への入り口となる「屋内/屋外」ギャラリーは、牟礼町の長身大ほどの岩をメインに設計されており、その先にある庭園への道のりに丁寧に配置された彫刻の構成は、ノグチと和泉が牟礼町で創作の雰囲気醸し出しているようだ。

30年以上にわたり、和泉はノグチに揺るぎないサポートをしてきた中で、和泉の家族の協力も大きな役割を担っていた。

和泉の妻である和泉晴美は、「ブラックサン」の表面をノグチの厳しい要求に合わせて何か月も手作業で磨いた地元の人々のチームの一員だった。

ノグチが日々ストーンサークルで集中して仕事ができるよう、和泉家は食事の支度等ノグチの身の回りの世話をした。

山本氏も言っていたが、和泉と和泉の家族はノグチを「影のように目立たずに」陰ながら支え続けた。

1970年代後半の和泉は、地元の若い石工達をノグチと彼の弟子とし育てていった。

ノグチは和泉と若い弟子達の仕事を次のように語っている。

「彼らは歩かない。常に走っている。彼らは単なる石工ではなく、スポーツ選手だ」と。

和泉は、自分の代わりに石彫り師笹尾正美にノグチの制作を手伝うようにさせ、和泉自身はノグチの制作活動の全体の監督をした。

ニューヨーク州ニューウィンザーのストームキングアートセンターにてノグチの作品である「桃太郎」の制作の際、和泉は小豆島で30トンもの多くの花崗岩を念入りに視察した後、ノグチにそれらの石を見せ、作品に使う大きさを測り、持ち運ぶことのできる大きさに切断した。

和泉は石を切断した後多くの花崗岩の破片を集め、ノグチはそれらの中から当初制作したシンプルな3つの石膏モデルから拡大した作品をインスタレーションに加えた。

このように、ノグチが好む石を理解し分かっている和泉は、いつでもノグチのイメージしている石、必要になるだろう石を前もって調達し、ノグチの仕事がスムーズに進むよう常にサポートしていた。

和泉はこのような石を求めるための費用や、切断の為の特殊な機械を入手する費用など様々なノグチのサポートに、家業の石材店の収入を当てた。

こうして和泉の存在は「ブラックサン」以降のノグチの製作活動の中核となっていった。

ノグチは和泉と仕事を始める前の1960年代初頭、テキサス州フォートワースにある第一国立銀行の依頼で、日本の花崗岩で作品を製作した。この際の様々な手続き、採石する場所、現場で作

業する石工や彫刻家の手配、輸送に関する税関の書類作成等々をノグチは一人でしなければならなかった。これらの手配は非常に骨の折れるものであった。

しかし、これらの一連の手配を和泉は難なくこなし、和泉の存在無くしてはノグチの20年間の製作を成し遂げることができなかつただろう。同様に、建築家でありエンジニアであるショウジ・サダオの存在も忘れてはならない。

1970年代から1980年代にかけてのノグチのプロジェクトには和泉の仕事ぶりがうかがえる。それらの作品には、シアトル市の共通役務庁の依頼のLandscape of Time (1975)の5つの庵治岩の配置構成や、クリーブランド美術館の石彫のPassage of the Seasons (1980-81)、ロサンゼルスの日米文化会館の2つの玄武岩で構成されたTo the Issei (1980-83)、フォートワースのキンベル美術館の4つの玄武岩で構成したConstellation (for Louis Kahn)、などがある。

カリフォルニア州コスタメサにあるCalifornia Scenario内にある万成石が積み上げられたSpirit of the Lima Beanは、和泉の石積みの技術が生かされており、「自然」でありかつ「人工的」な二面性を感じさせる作品である。

東京最高裁判所の通路にある「つくばい」、ニューヨークのメトロポリタン美術館アジア美術ギャラリーにある玄武岩の「ウォーターストーン」とイサム・ノグチ美術館の庭の中央にある「井戸」(つくばいシリーズ)にあるこれら3点は、和泉のコアドリルで石をくり抜く技法からインスピレーションを受けた作品である。

1988年にノグチが亡くなった後、日本におけるノグチのレガシーを引き継ぐ役割を担った。

和泉は、日本のイサム・ノグチ財団の会長を務め、1999年にオープンしたイサム・ノグチ庭園美術館の設立も手掛けた。また、1986年にヴェネツィアビエンナーレで展示された白いイタリアの大理石の「スライド・マントラ」(現在はマイアミのベイフロント・パークに設置されている)と対とな

るシリーズで「ブラック・スライド・マントラ」(札幌市大通公園)など、未完成だったプロジェクトを実現させた。これらの白と黒の「スライド・マントラ」の構想は、イェール大学のバイネック図書館にある白いダンビー大理石のサンクンガーデンとシアトルにある黒い玄武岩の「ブラックサン」は大陸横断的とも言えるノグチの構想は両極の対話を反映している。

もう一つの未完成だった傑出した仕事は、牟礼から少し離れた場所にある高松空港のための作品だった。この作品「Time and Space」は風変わりなピラミッドとドラムのような山の2つの形が融合し構成されている。石積みされた一つ一つの石はその自然な形と特徴が生かされている。

和泉は、晩年の数十年に亘って、日本とアメリカで彼自身が芸術家としても活動し、風景彫刻と石積みの壁を製作した。

ノグチと和泉の長いコラボレーションを見てきたノグチの弟であるミチオは、和泉が制作過程において、環境に調和するよう石に手を加え石を設置するための窪地や高台を作っていたことを見ていた。彼曰く「おそらく、それらが美しくバランスのとれたものでなければオブジェを彫刻や芸術作品とは言えないと考えていたのだろう」

ノグチと和泉の作品群は、サンフランシスコのアジアンアートミュージアム、シカゴ美術館、ラスベガスのベラージオホテルの他プライベートコレクションとしても米国各地に収蔵されている。

和泉自身の作品は、ニューヨークのロングアイランドにあるイーストハンプトンのロングハウスリザーブなどでも展示されている。

2016年10月、私は牟礼のノグチのスタジオを、シニアキュレーターのデーキン・ハートと初めて訪れた。そこはノグチが創り上げた世界観に溢れており、それを五感で感じることができた。

その空間は、和泉と美術館のスタッフによって管理され、和泉の希望でノグチが生きていた頃のままに残されていた。ノグチの住んでいた家はノグチが生活していた頃のままであり、ノグチの作

業場には使っていた道具類がいつでも彼が戻ってきて使えるかのように美しく整頓されていた。

その日の午後、和泉と娘の増田美穂子さんがストーンサークルから見える五剣山の斜面にある石造りの庭まで車で案内してくれた。その後、和泉は牟礼に点在する全て石造りの庭を体系的に案内してくれた。これは和泉の個人的なツアーであると後に教わった。

このツアーで牟礼を案内してもらい、ノグチを知ることができた。和泉がこの広大な地にノグチを導き、後にノグチにとって地質学的な標本の宝庫となったことが想像できた。

私達は、その朝早く石の水盤、破片、作りかけの作品がたくさん積まれた倉庫のような建物を通り過ぎノグチのスタジオにたどり着いた。

(その倉庫のような建物から数メートルのところにある等身大の男女のノグチのこけし(1951年)の花崗岩でできた和泉のレプリカには気付いたかもしれない)

和泉が「ブラックサン」を完成させたのはこの牟礼のスタジオであったこと、「ブラックサン」が1969年にシアトルへ出荷される前にここで祝賀会が開催されたこと、そして灯に照らされた小さな石が置かれた大きな花崗岩の一枚岩が敷かれた部屋へ案内され、ノグチと初めて出会った時にここで休憩をとり会話をし、絆を深めた場所なのでと和泉は語ってくれた。

私達の訪問は、ノグチの牟礼における原点に戻り、ふさわしい終わりとなった。